一つの異世界

南津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一つの異世界

【Ｎコード】
Ｎ０６２６Ｚ

【作者名】
南津

【あらすじ】
四季一（しきはじめ）は大学に通う２１歳の青年。中性的な整った顔立ちで、日本人らしい黒髪黒目。両親を幼い頃に亡くし祖父の家で暮らしていたが３年前にその祖父も亡くなった。両親と祖父の残してくれた遺産で大学近くの賃貸マンションを借り、階下にある洋服店でアルバイトをしながら一人暮らし。海外への短期留学の際に事件に巻き込まれて死亡、異世界に。膨大な魔力と特異な能力をもち、一人で異世界に放りだされたハジメの物語。

第０話<プロローグ>（前書き）

初めて書く物語ですので、文章が拙いものになっていたり。主人公最強物になりますが、戦闘が多いわけではない、と思います。バッサバッサ敵を斬ったり殲滅したりにはならないはず。ゆっくりとした更新になると思いますが出来るだけ長く連載をしていきたいと思います。

第０話<プロローグ>

「……」

僕の人生が終わった。
２１年。今日までの人生を振り返って長いのか短いのか。
天寿を全うする者からすると短いのだろう。母親から生まれて学校に通い、就職して退職。子供を育て両親を看取る。残りの人生をゆっくりと過ごすのが人生の目標だと言う人もいるだろう。
８０年。だいたいその８０年の間に人は様々な事を経験する。
僕の２１年はどうだっただろう。
幼い頃に両親を亡くし、祖父に引き取られて中学・高校に進学。祖父を亡くして大学に進学。借りているマンションの一階にある被服店でアルバイトをしながら生活費を稼ぎ、親の残してくれた遺産で大学に通う。
在学中に海外へ短期留学し、その海外でテロに巻き込まれて死亡。

そう、銃撃を受けて死んだはず。

「……ということはどうゆうこと？」

目の前に広がっている風景はテロ巻き込まれた場所じゃないことは確か。
人が溢れていた街中の景色はなく木漏れ日が溢れる森があった。辺りには木や草のほかは何も無い。銃で撃たれたはずの胸や腹部には風穴があいて……いない。

「撃たれてない？　いや、確かに撃たれた……はず」

マシンガンみたいなので撃たれて死んだ……いや、死んでないけど。とにかく此処が何処だか分からないからな。とりあえず森から出るべきなのかな？

「まぁいいか」

とりあえず森から出て人を探すことにしよう。此処が何処だか分からないんじゃ日本に帰れないし。

今日は留学先から日本に帰る日だった。チケットも買ったし……

「……って、あれ！？　カバンがない！？」

今気づいたが持ち物が何もない。チケットも財布も他の物もカバンに入れていた。大体のものは自宅に送ったが……

「はぁ、パスポートもない……」

ポケットを探ったが中には何もないみたいだ。

「どうやって家に帰れというのだ」

お金もないし、こういうときは何処に行けばいいんだ？　空港？大使館に行けばいいんだっけ？

「とりあえず森を出ようか」

どちらに行けば良いのか分からないので少しでも明るい方に行くか。

◇　◇　◇

「……」

しばらく歩いて行くと何やら物音が聞こえてきた。人かな？
森といったら熊とかだけどそうそうエンカウントするようなものでもないだろう。……海外なら狼とかいるのか。

「怖っ」

少々寒気がしたが大丈夫……だろう。
……念のため石と木の棒を拾っておこう。
人じゃなかったら怖いからな……慎重に近づくとしよう。
物音のするほうに気配を消して近づく……祖父に習って剣道を少しやっていたけど気配消す練習なんてしていない。
気分の問題だ。

近づいてみて驚愕した。

「なん……だと……」

なんて言って気を紛らわさないとやっていられない。
熊みたいなのがそこにいた。体格的にみてそう判断したんだが……
これはヤバイ。
その熊を更に大きな何かが貪っている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

熊や狼ならともかくあんな物に襲われたらあの熊みたいになってしまう。
可及的速やかに此処を離れなくては。足音と息を殺して慎重に離れ

ないと。
此処でお約束の枝なんか踏んで物音を立てるようなドジな真似なんかしない。
慎重に……
ガサッ！
「っ！！」
……決して僕じゃないですよ。ホントに。
物音がした方を見ると何やら小さな動物がこちらを伺っていた。
「……」
振り返ってみると其処にいた何かは此方を見ていた。
いやいや……勘弁してくださいよ。

◇　◇　◇

「っ……はっ、くぅ！」
引き離せない！　どころか少しずつ距離が縮まっている気がする！
とりあえず明るい方へ走っているが後ろのストーカーが諦めてくれない。
だんだん足音が近くなっている気がする。
僕は美味しくないよ！？

絶対さっきの熊みたいなやつの方が肉も多いに決まってるよ！！
何でこっちにくるんだ。
泣き言を口から洩らす余裕もない。息が上がる。足が上がらない。
足には自信があるが足場の安定しない森の中で必要以上に体力が奪われる。恐怖で緊張し更に思うようにいかない……

「っ……！！」

瞬間、背筋に悪寒が走った。
咄嗟に横に跳ぶと今まで走っていた所を何か大きなものが過ぎった。
目の前に出たのは毛皮に覆われた何か。さっきから追いかけて来ていたやつだ。よく見ると狼に似ているが正面から見ただけで自分の身長を超えている。顔は真っ赤に染まっていて先ほどまでの食事の跡が窺える。
既に立ち上がる気力すらなく恐怖に震える。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！

それは此方に向けて跳んできた。
恐怖が膨れ上がり体の奥から何かが急速に広がる感覚。

そこで僕は意識を失った。

第0話<プロローグ>（後書き）

おわり……え？

まだ主人公の名前も出てないので続きます。

第1話＜四季一＞

「……ん」

（体が重い。なにがあったんだ？　テロで殺されて、それで……）

微かに意識が戻った青年は地面に横たわったまま回想する。

（森の中で彷徨って……）

「美味しくないよ！？」

「……っ！？」

食べられる前に見た光景を思い出し、叫びながら勢いよく起き上がる。体は重い感じがするが特に痛みは無い。

（味見もされなかったのだろうか。）

あの状態で無事だったことが信じられない。あの巨大な狼が目の前に迫る瞬間が鮮明に思い起こされた。背中を冷たい汗が流れる。

「夢……か」

無事なところを見ると夢だったのだろうと考える。妙にリアルな夢を見てしまったようだ。最早何処から何処までが夢だったのか分からない。

（テロに巻き込まれたのも夢だったのか？）

「目が覚めました？」
「え？」
不意に声をかけられて其方を見ると、其処には見たことも無いような美少女がいた。年齢は青年と同じくらいか、少し下の金髪の少女が椅子に座って青年を見ていた。艶やかなロングの髪は少女の整った顔立ちによく映える。透き通る碧眼は青年の姿を捉えている。
少女の姿に思考が停止し、しばしの間惚ける。
「……」
「……聞いてます？」
少女は何かを青年に話しかけていたらしい。
「あ、すみません。聞いてないです」
惚けていたことを恥ずかしく思いながら何とか返答する。
（あ、聞いてないですなんて失礼だよな……。まぁ実際に聞いてなかったんだから仕方ない。）
「……。ディゴウの森で何があったのか教えてもらえます？」
聞いたこと無い地名に青年は疑問を口にする。
「ディゴウ？」
「あなたがいた森のことです。二日前あなたが倒れていた森です。覚えてないですか？」
「いや、森にはいたけど……二日前、ですか？」

（どうやら二日も眠っていたらしい。ということはもう九月になったのか。明後日からバイトが入っていたっけ。帰るのに時間がかかりそうだから後でバイト前に電話を入れておかないといけないな。留学で結構お金を使ってしまったから少しバイトを増やした方が良いだろうか。大学卒業してしばらく暮らすには問題ないが、親が残してくれたお金は出来るだけ残しておきたい。）

これからのことをつらつらと考えていると少女から再び聞き覚えの無い単語が聞こえてきた。

「ええ、今日はテルトゥリア一巡月の七日です」

「……テルトゥリア？　って、なんですか？」

とりあえず疑問をそのまま投げかける。彼女の言い回しから今日の日付を言っているのだろう事は推測できるが。

「……大地の神の名前です」

「大地の神？」

「ええ、風の神ヴァンテセラ、火の神フォティエナ、大地の神テルトゥリア、そして水の神オーズィオ。その名前は風の季節、火の季節、地の季節、水の季節のことも示しています。常識ですよ？　覚えてないんです？」

「いや、そもそもそんな神様なんて知らないですけど」

「……」

「……」

二人の間に重たい沈黙が流れた。そんな神様の名前は青年には聞き覚えが無い。それに、四季を表すのに風や火、地や水を用いることもなかった。

（この際分からないことは置いておいて現状の把握に努めることにしよう。）

「……えっと、ここは何処ですか？」

当たり障りの無い内容から確認する。意識を失っていた人間の常套句だ。

「……ここは私の家です。貴方はディゴウの森で気を失っていて、色々と聞きたいことがあったので保護しました。森で何があったか聞かせてもらってもいいですか？」

彼女も様々な疑問は置いておいて聞きたいことだけ先に確認することにしたようだ。逸れていた最初の話題に話が戻った。

「それはいいですけど……それならあとで君に聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

（此処が誰の家かは分かったが、此処が何処かという疑問は解消されていない。後でもう一度聞いてみないといけないか。）

「……いいですよ。私はフランシェシカといいます」

君という呼び方をしたためか彼女は名前を名乗った。そこで青年も自己紹介をしていなかった事に気付く。慌てて謝罪をし自己紹介を始める。

「あ、すみません。僕は一（はじめ）といいます。四季一（しきはじめ）です」

「シキというと季節の四季ですか？」

「ええ、四季が苗字で一が名前ですね」

「みょうじ？」

フランシェシカは四季は分かるのに苗字が何か分からないらしい。

（外国の人みたいだからかな？）

「あ、えーとファミリーネーム？　家名ですか？」

「ということはハジメ・シキですか」

「そうなりますかね……？　あれ、そういえば日本語が通じてるんですか？」

（日本語で話しているつもりなのだが、此処は日本なのだろうか？）

「ニホンゴ？　話しているから言葉は通じてますよ。この世界で生まれたものには皆言葉の加護がありますからね。会話は誰とでもできますよ。文字はいくつか種類があるので……って常識です」

（コトバノカゴ……？）

「え。言葉の加護ってなんですか？」

再び疑問に思ったことを口に出す。自己紹介を始めたことで再び話題が逸れてしまっているのだが……

「……」

「……」

（……どうやらこれも常識というもののようだ。）

「……とりあえず、森であったことを先に聞いていいですか？」

逸れてしまった話題を元に戻すべくフランシェシカはきりだした。

◇　◇　◇

「……そうですか」

ハジメが森での出来事をフランシェシカに説明すると、彼女は沈痛な面持ちで一つ頷いた。ハジメが話をしている間フランシェシカは特に口を挿むことなく黙って聞いていた。

「ええ。あれはなんだったんですか？　見たことのない動物だったんですけど」

「それはおそらくクルォルウルフだと思う。最近あの森で目撃されていた魔獣ね。私もあの魔獣を討伐しにディゴウの森に行ったんだけど、現場の様子と貴方の話を聞いたところもう死んでるようね」

「……？　死んでるって……そのクルォルウルフ？　とか言う」

（僕が死んでいないのだから何かあったのだろうが、死んでいるとはどういうことだろうか。話し方からすると死体の確認をしたわけではなさそうだけど。）

「ええ。おそらく貴方の魔力の暴走で跡形もなくね。酷いもんだったわよ。普通の人間の魔力が暴走したところであそこまで被害が出ることなんてないのに。精確には分かんないけど視た限りじゃ貴方の魔力は私以上ね。いえ、たぶん貴方より魔力が高い人なんて居ないんじゃない？　貴方本当に人間なの？」

（魔力？　暴走？）

「人間ですけど……。それより魔力ってなんですか？　そんなもの無いと思いますけど」

魔力というとファンタジーとかでよく聞く単語だ。物語の中ではよく聞く言葉だが、実際にそんなものがあると聞いたことは無い。先ほどから神の名前だとか魔力とか聞いていると何故か変な事に巻き込まれているような気がしてくる。

（……宗教の勧誘だろうか。）

「……貴方それ本気で言ってるの？　さっきから常識も知らないし」
「いや、常識と言われても。知らないものは知らないですし」
「そう。……そういえば貴方何処から来たの？　常識も知らないし何処かの山の中で暮らしていたのかしら？」

（なんだか失礼なことを言われた気がする。……まぁ良いけど。）

「街に住んでましたけど……日本です」
「ニホン？　聞いたこと無い国ね。えっと……この地図のどの辺りかしら」

フランシェシカは部屋の棚から折りたたまれた少し茶色掛かった紙を引っ張り出す。地図らしいそれを広げてハジメに見せる。

（日本は太平洋の……太平洋……の……）

「……えっとこの地図って何処の地図ですか？」
「……世界地図だけど」

見たこと無い地形の描かれた世界地図らしきもの。大陸のようなも

のは三つ。ハジメはどの大陸の地形も見たことが無い。地図に書き込まれている文字も読めない。

「ははは、冗談きついですね。こんな世界地図見たことないですよ」

「……」

「はは……は……」

「……」

再び二人の間に重たい沈黙が落ちた。

◇　◇　◇

「異世界……ね。本当にそんな所があるのかしら」

フランシェシカに森に来る以前のことを説明した。今まで居た世界がどんな世界だったのか。そして、どのようにして死んだのか。

「いや、僕も分かりませんよ」

本当に分からない。しかし、今が現実だというのならそういう事なのだろう。元の世界で銃で撃たれたことも、この世界で生きていることも。

（あちらの世界はどうなっているのかな。日本のニュースなんかで「行方が分からなくなっているのは日本人留学生の四季一さん。現場に所持品と共に血痕が残されており……」なんて報道されているのだろうか。そもそも死体は残っているのだろうか。）

「その話が本当なら、貴方はそちらの世界で死んでるんじゃない？」

「まぁ、あの痛みは本物だったけど」

（傷が残っていないということは別の肉体なのだろうか……治っただけなのか。）

「そちらの世界で死んで、原因は分からないけど此方の世界にその姿で転生した。そう考えるべきでしょうね」

「あの傷で生きていられるとは思えないよね……もう戻れないかな」

身内も居ないため、あまり困ったことにはならないだろうが、バイト先とか大学とかにはそれなりに迷惑が掛かるかもしれない。

「少なくとも異世界へ行ける、なんて話は聞いたことが無いわね」

この世界でもそんな話は聞いたことが無いようだ。帰る方法を探しながら此方で暮らしていくしかないということだろう。

（……向こうの世界にあまり未練も無いけど。）

「そっか……これからどうしようかな」

「とりあえず、この世界のことを話すから。それから考えましょう？」

「そうですね」

とりあえず此方の世界のことを聞いてから考えるのもいいだろう。魔力なんてものがあるくらいだから魔法なんかもあるだろう。

少しわくわくしてきたのはとりあえず内緒だ。

第2話＜サルトクリゼ＞

神々の加護の恩恵を受けた世界、サルトクリゼ。この世界で生まれたものは皆、様々な加護の恩恵を受けて暮らしている。その最たる物が魔法である。この世界に暮らす者は誰一人例外なく魔力を保有している。最もその資質は個人で大きく異なるのだが、資質を持たないものは魔力こそあるが自ら魔術を行使することが出来ない。

魔術の属性にも様々な物がある。最も一般的な属性は五つで、無属性、地属性、水属性、火属性そして風属性だ。資質を持つ者の殆どはこの五つの属性の特性を示す。

更に極稀に空属性、時属性、光属性、影属性に資質が有る者も居る。現在確認されているこの四つの稀属性の魔導師は空が二人、光が五人、影が七人。時の属性を持つものは二十年ほど前から確認されていない。

魔術の資質を持つ者の多くは一つから三つの属性に目覚める。二つの属性の資質を持つ者が最も多く、次が一つの属性、更に少なくなって三つの属性となる。四つの属性を示すものは更に稀で、確認されているものは世界でも二十人程。稀属性を持つものは皆この内に含まれている。

この資質の組み合わせは様々であり、発現し易い属性順に並べると無＞地＞水＝火＞風＞＞＞影＞光＞空＝時と考えられている。この資質は生まれた時から決まっていて生涯変わることはない。

この大陸“カドラグニス”は様々な種族が国家を形成して暮らしている。エルフ族、獣人族など、人間族以外の種族も存在する。人間族の多くはその他の種族を亜人種と呼び区別している。カドラグニスに点在する国家の殆どは人間族の国家であり、亜人種の人権を認めていない場合も多い。

他種族より魔力も力も弱い最も人口の多い人間族は、国家を成して

暮らしている。魔力の低い人間族は寿命も１４０～２００年と、獣人やエルフなどの他の種族に比べて短命だ。他種族間の半血種族（ハーフ）も存在し、その場合も魔力によって大体の寿命が決まっている。この半血種族も人間には亜人種とされて区別される。

ハジメが今居る此処はカドラグニスの大国の一つであるサルクノーレ王国にある一都市から少し離れた森の中にある。サルクノーレには他種族も暮らしており、他の国家よりは人間族以外にも比較的暮らしやすい国である。

フランシェシカはエルフと人間の半血種（ハーフ）で、現在８２歳らしい。これは長寿のエルフとしてはまだまだ若く、人間の年齢で考えると成人年齢《１６歳》より少し上程度である。最も人間からすれば知識も経験も豊富なため人間の基準で考えることは出来ない。またフランシェシカの魔力はエルフの中でも高い部類に入り、人間との半血種だがエルフの特徴が濃く現れている。

「フランシェシカさんはエルフのハーフなのか」

「ええ。半血種だから耳はエルフより少し短いけどね」

「へぇ……触ってみても良い？」

やはり気になってしまう。触らせてくれないだろうかと目を輝かせながら尋ねる。

「良いわけないでしょう」

「いや、やっぱり気になるというか。前の世界には人間しか居なかったし」

（獣人も居るということは猫耳やら犬耳なんかも居るのだろうか……。爺さんの家で昔飼っていた犬の耳も気持ちよかったし、触ってみたいものだ）

「自分の耳を触ればいいでしょう。そんなに変わらないわよ」
「むぅ……」

（そうだろうけど、エルフの耳ということに価値があるんじゃないか……）

未練たらしくフランシェシカの耳を眺めていると少し顔を赤くしながら話題が変えられる。

「他に聞きたいことはない？」
「んーと、僕の魔術の属性は分かるのかな？」

魔法があるのなら使ってみたいと思うのは当然だろう。しかし適性がないと魔力があっても使えないらしいためドキドキしながら質問する。

「それは実際に調べてみないと分からないけど」
「どうやって調べるの？」
「簡単な魔術を使ってみるしかないわね。暴走したのだから何かしら適性はあると思うけど」
「……暴走したら何か属性に適性があるって分かるの？」

属性があるだろうと言われて少し安心したが、その根拠が分からなかった。

「ええ、属性を持つもので魔術を学んでいない者は大体子供の頃に一度は暴走するの。貴方ほどじゃないけど部屋の中のものが壊れる程度にね。洗礼みたいなものよ」
「ふーん。……そういえば最初魔力の暴走でクルォルウルフとかが死んだはずだって言っていた気がしたけど」

「貴方の暴走は最悪だわ。周りの森ごと消し飛んでいたもの。家の中や街の中だとすごい被害が出ていたでしょうね」
「え……」
「五十メルデくらいの範囲の地面が抉れてその真中辺りに貴方が倒れていたの」
「五十メルデ？」
「ん？　あー……この部屋の端までが四メルデくらいかしら」
（ということは一メルデが大体1メートルかな？）
「って、五十メルデ！？」
五十メルデが五十メートルだとすると相当な範囲だ。それが消し飛んでいたらしい。
「ええ、森の一角が綺麗になくなっていたわ。その中心にいたんじゃ、クルォルウルフも一緒に死んじゃったんじゃないかな」
「……」
「とりあえずまた暴走しないよう魔力のコントロールを身に付けなさい。属性の魔術が使えるようになれば暴走することも無くなるでしょう」
「……どうやって？」
コントロールを身に付けると暴走も起こり難い。魔力の制御の方法が分からないとどうしようもないが。
「それは私が教えてあげるわ。人間はあまり好きじゃないけど、貴方は異世界の人間だし興味があるわ。魔力もかなり多いみたいだし」
フランシェシカはあまり人間が好きじゃないようだ。人間の多くは

他種族を差別しているみたいだから仕方ないのかもしれないけど、昔何かあったのだろう。

「いいんですか？」

「いいわよ。まぁ貴方の体調と魔力が整ってからになるけど。暴走の後は意識を失うし四，五日は魔力を使わない方がいいから」

「よろしくお願いします。フランシェシカさん」

「フランでいいわ。貴方のこともハジメって呼ぶから。あ、それと貴方は簡単に家名を名乗ったけど初対面の相手にはあまり名乗ることは無いからね。覚えておいた方が良いわ」

（やっぱり貴族なんているんだな）

「初対面の人に名乗らないんですか？　僕の世界では普通に名乗っていたけど」

「貴方の世界はどうか知らないけど、此処だと家名がある人間は貴族とか王族とか、他にもいるけど少ないのよ。信用できない人間に名乗る必要は無いわ」

「フランも家名はあるの？」

「ええ、フランシェシカ・ラザラズ。それが私の名前」

「貴族？」

「貴族は人間の爵位でしょ。エルフの家名はあまり関係ないわ」

「ふーん。……家名を教えてくれたってことは少しは信用されてるって事かな？」

「……」

若干きつめの視線でにらまれた。美人な分、睨まれた時のダメージは大きい。

「じょ、冗談です」

「……しばらくこの家で暮らすことになるだろうからね」
「え、此処に住んで良いの？」
「何処に行く気よ。此処から街まで歩いたら三日ほどかかるわよ？
行きたいなら別にいいけど」
「ここに居させてください」
「……他に聞きたいことは無い？　魔術の練習も早くても明後日からになるし、聞きたいことが見つからなかったら明日聞いてくれてもいいけど」
「うーん……この世界で暮らしていくために知っておいた方が良い事はないかな」

すぐには思いつかなかったため今日のお勧めを聞く。

「……色々あるわよ。言葉は通じるけど文字は覚えないとだめね。ギルドなんかで依頼を受けるにしても読めないとだめだし。魔術と一緒に覚えていった方がいいわ。文字が読めれば本も読めるしこの世界のことも色々調べられるでしょう」
「文字か……。言葉が通じるのに文字は読めないのは不便だね」
「言葉は加護を受けた時点でこの世界の誰とでも話せるからね。貴方が喋ってる言葉も違和感無いわよ？」
「……そういえばそうかも。なんか日本語で話してるけど日本語じゃないみたいな……」

（そもそも今考えているのも何語で考えているのか分からなくなってきた……思考がこの世界の言葉に統一されたのかな……）

「文字は幾つか種類があるって言ってたけど、それは？」
「この世界は言葉も共通だから文字も基本的には共通よ。古代文字なんかもあるからね。覚える必要は無いかな」

文字は一種類だけでいいのか。元の世界じゃ考えられないな。ということは通貨なんかも共通だったりしないのだろうか。

「それじゃあ、お金について」
「お金か……ちょっと待ってね」

言って部屋を出て行き、戻ってくるとフランは小さめの袋を一つ持っていた。ベッドの上に袋から取り出した硬貨を四枚並べる。

「この銅貨が基本で一エイド。銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚でこの小金貨。小金貨が十枚でこの金貨一枚ね」

一緒に聞いた宿の代金や食事の値段から通貨の価値は銅貨が百円くらいで小金貨が一万円くらいの価値があることが分かる。小金貨から通貨の単位が変わるようで、小金貨は一アルド金貨とも言われている。
通貨には他の金属も入っていてその比率は決められていてギルドというのが出来て暫くして世界共通になったようだ。偽造は魔術で簡単に分かるようになっているとの事だ。

「あとは……さっきも言ってたギルドって言うのは？」

先ほどの会話に出てきた気になる単語をあげた。

「ギルドは幾つか在るわ。一番人が多いのは冒険者ギルドね。これは世界中にあるわ。後は各国で魔導師ギルドや商人ギルドなんかがあるかな。商人ギルドは国を跨いで在る事も多いけど、魔導師ギルドは基本的に自国内にしかない」
「冒険者ギルドか……定番だな」

異世界ときたら冒険者ギルドだろう。知ってました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0626z/

一つの異世界

2011年12月4日02時30分発行